

「40 年のあれやこれや」



沖縄県立中部病院 久島 昌弘

この3月で県立中部病院を定年退職し、会計年度任用となった。それを機に色々と考えた中から、どなたかのインスピレーションにでもなりそうなことを書いていく。

先日、母の葬儀を執り行った。現役時代、赤江療養所（現宮崎東病院）に原付で通勤していた母は、ある日、運転免許を持たないままドイツ車のフォルクスワーゲン・ビートルを買い、それから自動車教習所に通い、免許取得の日に教習所に配車してもらったビートルに乗って帰ってきて、そのまま50年近くその1台のビートルだけを乗り続けた。新し物・本物へのこだわりが強く、自分のことでは一切妥協しない人だった。

結局のところ、私はこの人の影響を強く受けているのだと思う。

母は絵と写真がたくさん載った講談社現代世界百科大事典を買ってきた。その絵の部分だけを読み、織田信長、岡本太郎、尾形光琳、御所人形、小尉、胡椒、核分裂（原子核・細胞核）、ガリレオ、カーリングなどと雑多な知識を得て、私は雑学少年になった。

彼女はまた本邦初訳のジュール・ヴェルヌ全集24巻も買い与えた。「海底二万里」や「十五少年漂流記」から「征服者ロビュール」「カルパチアの城」など全部読み、雑学少年はSF少年になった。「サンダーバード」で私は科学の信奉者になった。そして小学5年生の時、これも何故か母が差配したのだが、銀座の映画館で「2001年宇宙の旅」を観た。これが決定的に自分の世界観を規定した。この世界は科学を突き詰めることで解釈可能だが、その先に人智の及ばない世界もあり得るのだ、と知った。

大学に入り、バンドとマイコンクラブを始め、自動車クラブでラリーを、ワンゲルで登山を始めた。目につく新しめのものにはあらかた手を出していった。「好奇心を邪魔されなかった」ことが一番大きいのだろうと思う。

「始めたことはプロの8割になるまではやめない」という気概で向き合っていると、不思議と業界のプロと接触し共通言語で話す機会が増え、その世界について知見を深めるのに役立った。大学の夏休みの度に病院研修と称して上京し、夜は田園コロシアムの5日通し「ライブ・アンダー・ザ・スカイ」ジャズライブ、昼は美術館をはしごした。常設が素晴らしい国立西洋美術館とブリヂストン美術館（現アーティゾン美術館）が好みになった。

中部病院の試験は熊本で受けたが、市内で開催中だった「ダリ・ピカソ・シャガール展」を観たことを面接官だった平安山英盛先生とJ.B.タルウォーカー先生に話した。それで晴れて合格となった。「これからは医学だけをやるのだ」と決め、中部病院ではこの手の活動を広げなかった。ほとんど病院の外へ出ない生活になったが、なぜか「風の谷のナウシカ」を観に、胡屋十字路にあった映画館に入ったことは覚えている。病院から出ない代わりに、オンラインネットワークにつながった。研修医はもちろんだが、オンラインの情報系の仲間・学生は皆若い人たちで、年を経ても新しい技術や考え方を次々と自分に紹介し続けてくれ、それにより知識がアップデートされ、人脈が拡大し続けている。

中部病院には故安里浩亮先生をはじめとしてたくさんの恩師がいるが、本稿では病院の外の二人の恩人の話をしよう。

一人は陶芸家で前沖縄県立芸大学長の大嶺實清先生だ。先生は哲学科から教師になり、その後沖縄の伝統の陶芸の美を知り、その道に横から入ってきた人だ。外様であるからこそ、伝統の本質に迫ろうとする姿勢が強く、そこに惹かれる。というよりウマが合うので家族ぐるみで付き合い、こちらから出向いて茶を点てて遊ぶ間柄になっている。

大嶺先生から白洲正子を知り、本物を見る目について学び、茶道への道が開けた。そこにもう一人の恩人、茶道裏千家の仲田宗恵先生がいらっしゃった。ひっそりとしておられるが、学ぶ意欲が強く、また教えにも妥協がない。平伏す思いである。

大嶺先生・茶道と白洲正子を介して日本の書画骨董・芸術作品、文芸に興味を持つことになった。白洲正子の文体に強く惹かれ、文章修業の目標になっている。古今和歌集を Kindle で持ち歩き、たまにプレゼンに引用する。源氏物語は与謝野晶子版、谷崎潤一郎版、現代京言葉訳(京都弁)を読んだ。

ネットで戦場写真家ジェームズ・ナクトウェイのプレゼンに出会った。悲慘な紛争の現場の写真が美しく撮られているという衝撃的な映像で、自分にはこれが「世界には悲慘も美も全てが詰まっている」というメッセージに見えた。これで TED カンファレンスを知った。ジャンルを超えた超一流ばかりを集めたカンファレンスで、その有様に強く惹かれた。これは沖縄でもやらなくては、と TEDxRyukyu を 2 回主宰し、TED のビデオの翻訳をすることになった。芸術・自然・科学・スポーツ・社会問題などなど、

専門家をノンジャンルでキュレーションし、プレゼンの指導をし、ビデオにキャプションをつけるのだが、自分にたいいていの領域の雑学知識がある状態が非常に役立った。

コロナの時代になり、オンライン勉強会、読書会に参加するようになった。ここで 14 年も積読していたアイン・ランドの「水源」1000 ページを 6 人で読破した。自由とは本当は何なのかを問題提起する素晴らしい本で、まったく現代的だった。この本はどなたにもお薦めしたい。今は現代美術とデータサイエンスをオンラインで勉強している。

赤道儀天体望遠鏡と CMOS カメラで大星雲をモニタで鑑賞するテレビ観望を、古い mac に linux をインストールし、専用ソフトを動かして準備している。

まあ、あれやこれや、どれも不器用にあっぶあっぶとやっている。学ぶばかりである。たまには発見もする。ごく稀に、こちらから何かを提供できる、という塩梅だ。

結局のところ、これら全てをまとめて表現できるのが「リベラルアーツ」という言葉だ。どんな学びも無駄にはならないし、ノンジャンルの知の新たなつながりを発見することでまた新たな知が生まれ、それはあなた自身にも、あなたとの関係がある人たちにも影響をもたらす。それを次の世代、若い世代になんらかのインスピレーションとして渡していけばいいのではないか。そんなふうに考えている。

